余暇のひととき

文化協会より

短歌

〈水沼短歌会〉

昭和への想ひ残して躬は老いぬ彼の人恋も今はうたかた　谷　静雄

レジ横の盲導犬の募金箱つり銭僅かを受け取り入れる　生田　八壽子

大山の山脈横に運転す出雲の旅の想い出に満つ　井関　恭子

巣立ちゆく子つばめ三羽青空に点になりゆく一周舞ひて　黒田　登代子

夜半にさめし眠れぬ夜はつけてみるテレビ画面に助けられるる　芝　征世

長崎の海上をいま進みゐる台風は恵みの雨もたらせり　竹城　美智代

富士山が世界遺産となりし日にちぎり絵の赤富士出して祝へり　土居　シゲ子

金木犀の小花散り敷く里の道一つの記憶胸に温たむ　毛利　ユリ子

母に手をひかれゆきたるふるさとの畔道かはらず彼岸花咲く　山田　田鶴

俳句

〈渋柿　若葉会〉

園児等の弾ける声の小春かな　山本　雅江

凍星や早朝散歩の歩を早む　宮川　伊都子

サンタさんは園長先生と知りつれど　三浦　のぶ子

行儀よく脱がれし靴の小春かな　芝　ヤエミ

粉雪の何時か深雪となりにけり　玉岡　扶見子

耳遠き人と筆談小六月　宇都宮　環

冬の夜雅楽の音色みやびなる　石川　恵子

ふりしきるくすしき光冬星座　水本　京子

故郷のあの丘この道蜜柑照る　田中　しん子

降りしきる音なき音の落葉かな　三原　美加

〈渋柿　ふじ句会〉

湧水に浸して青き冬菜かな　佐々木　皓一

診察に先づ着ぶくれを詫びにけり　橋本　保子

頼りなき独り暮しや木の葉髪　三浦　多恵子

段畑に日の恵みあり冬耕す　水口　艶子

寄せ植ゑの紅鮮やかや冬薔薇　吉見　さつき

枯菊を焚けば香に立つほむらかな　南君　ため子

冠雪の遠石鎚や冬に入る　菊池　かほる

時雨るゝや山路駆け来る人のあり　森田　寿美

野良猫の縁にごろ寝や冬うらゝ　二宮　美千代

冬晴や山頂遥か雲ひとつ　二宮　リヱ子

追い付けぬ母の味付け煮大根　萩森　理枝

冬木立枝越しに透く線路かな　浅野　美津子

俯きてクリスマスローズ優しかり　平田　富士子

川柳

〈川柳鹿の子吟社〉

抽選にいつも当たらぬ未練券　宇都宮　忍

波力発電波に乗れるか宇和島市　大西　直子

夫婦みち相身互いの七曲り　河野　秀夫

ありがとう言って言われて日々平和　志摩　佳聲

これもまた終の伴侶か車椅子　中村　地青

いい方へとると血液流れ出す　日高　伸子

平均を越えてアクセルゆるく踏む　松本　圭市

笑顔ならまだすっぴんの高感度　松本　志津子

八十の手相お迎え先の先　宮川　柳酔